

師古齋コレクション『漢魏雜存』について

— 中国彫刻をめぐるささやかな近代史 3 —

大阪市立美術館は岡村蓉二郎氏(1910-91)が収集あるいは自ら採拓した中国金石の拓本約450件を師古齋コレクションとして収蔵しているが、その中には石造仏教・道教像の図様も少なからず含まれている。

今回紹介するのは『漢魏雜存』と題された拓本帖の一葉である(挿図・註)。造像の正面下部及び側面の計3箇所からなる拓本で、上半部には岡村氏による採拓にあたっての顛末や紀年銘に関する考察が記されている。その内容を、登場人物について補足しながらまとめると概ね次の通りである。

(採拓した)この造像は、中華民国陸軍大学教官、満洲国軍政部最高顧問や陸軍北支方面軍司令官を歴任した多田駿氏(1882-1948)が所蔵するもので、北京で成立した中華民国臨時政府及び華北政務委員会の首脳であった王克敏氏(1873-1945)より贈られたと聞いている。私(岡村氏)は本像を昭和16年(1941)6月に多田氏の留守宅において、子息の顕氏(後に千葉大学等で教鞭を執った経済学者)の好意により採拓することがなかった。向かって右上の拓片にある紀年銘は北齊の元号「武平」なのか北魏の「武泰」なのか判別しがたいが、本像には北京公使館書記官や南京総領事を歴任した外交官であり、満洲国外務局情報部長も務め、美術コレクターとしても知られる須磨弥吉郎氏(1892-1970、書齋を梅花草堂と名付けた)の観記が附属し、そこでは「武平」としている。しかし私は「武泰」と読むと判断したのだが、その後に兵庫・芦屋の山口家で本像と同じ様式の造像を見た時に疑念が払拭された。

以上のように多くの人物が登場する興味深い文章で、中国の高官から多田氏へ仏像が贈答されたこと、その作品を多田氏が日本の美術コレクターの鑑賞に供していたことがわかる。さらに芦屋の山口家とは、本館蔵山口コレクション中国石造仏教・道教彫刻を収集した山口謙四郎氏(1886-1957)と推測される。多田氏が山口家で観た「同じ様式の造像」は確認しえないが、本館蔵・山口コレクションに含まれる北魏・延昌4年(515)銘石造道教三尊像の可能性が高いかもしれない。なお多田氏自身も明・清時代の兵法書を収集したことで知られ、没後に子息の多田顕氏から早稲田大学へ寄贈されてい

る(宝籟室文庫)。このように本館蔵・師古齋コレクション『漢魏雜存』は、第二次世界大戦前夜における肩書や立場をこえた美術コレクターのネットワークを垣間みることができる貴重な資料といえるだろう。

さてあらためて拓本をみると、本像はその銘文から少数民族の羌族をルーツとする鉗耳氏が、北魏・武泰元年(528)に造立したものであることがわかる。図様は造像の正面下部にあたり、垂下する衣を均質な平行多線文を用いながら極めて装飾的に表しており左右端はくるっとカールしている。こうした独特な衣文表現は、北魏(5世紀前半)の陝西省西安とその近郊に分布する一群の仏教・道教像と共通していることから、本像の原所在地も同地域と考えられる。残念ながら現時点で本像の所蔵先は不詳であり実見することはできないが、これからも細々とではあるがその行方を追いつきたい。

(註)『大阪市立美術館紀要 中国金石拓本目録』1978年における表記は、「449『漢魏雜存』(14)□耳造像記」である。

※ 機関・肩書等の名称は当時のまま表記している。

(齋藤龍一)

